岡崎高等師範学校

―新制名古屋大学の包括学校③―

山口拓史

名大史ブックレット
8

名大史ブックレット　8

岡崎高等師範学校

―新制名古屋大学の包括学校③―

山口　拓史

目　次

はじめに……2
一　戦前における師範教育……3
二　創設の経緯―岡崎市による設置運動―……9
三　岡崎高等師範学校の誕生と終戦……21
四　終戦直後の岡崎高師―豊川市への移転―……32
五　名古屋大学への包括……39
六　黎明会―岡崎高師同窓会―……49
おわりに……51

はじめに

岡崎高等師範学校（以下、岡崎高師ともいう）は、理科系の中等教員の養成を目的として、一九四五（昭和二〇）年四月一日に創設されました。それは、東京（一八八六年）・広島（一九〇二年）・金沢（一九四四年）に続く四番目の、そして最後の高等師範学校としての誕生でした。その後、岡崎高師は、戦後の学制改革によって、一九四九年五月には名古屋大学岡崎高等師範学校となり、一九五二年三月に廃止されました。その創設から廃止までの期間は、わずか七年でした。しかし、その七年間は、戦時期・終戦・戦後改革期にあたり、日本にとっても岡崎高師にとっても、まさに激動の期間であったといえます。

本書では、新制の名古屋大学に包括された学校の一つとしての岡崎高等師範学校に焦点をあて、同校の創設経緯から廃止に至るまでを紹介するとともに、戦後の学制改革において旧制教育機関が置かれた状況についても紹介することにしたいと思います。

一　戦前における師範教育

◆師範学校と高等師範学校

日本における戦前の教員養成制度の特徴は、独立する学校として特設された師範学校で教員が養成されるという点にあります。その基本的な骨格は、一八八六（明治一九）年の「師範学校令」によって作られたものでした。それは、尋常師範学校（のちに師範学校）と高等師範学校という二種類の学校を設けて、前者で小学校教員養成を行い、後者で中等学校教員養成を行うという形をとっていました。

小学校教員を養成する（尋常）師範学校は、高等小学校の卒業を入学資格とする府県立の学校（公立師範学校）で、中等教育レベルの機関として位置づけられていました。一方、中等学校教員を養成する高等師範学校は、中学校あるいは師範学校の卒業を入学資格とする官立学校で、高等教育レベルの機関として位置づけられていました。師範学校令が公布された一八八六年以降、終戦を迎えた一九四五年までの各学校数の推移は、**図1**のとおりです。

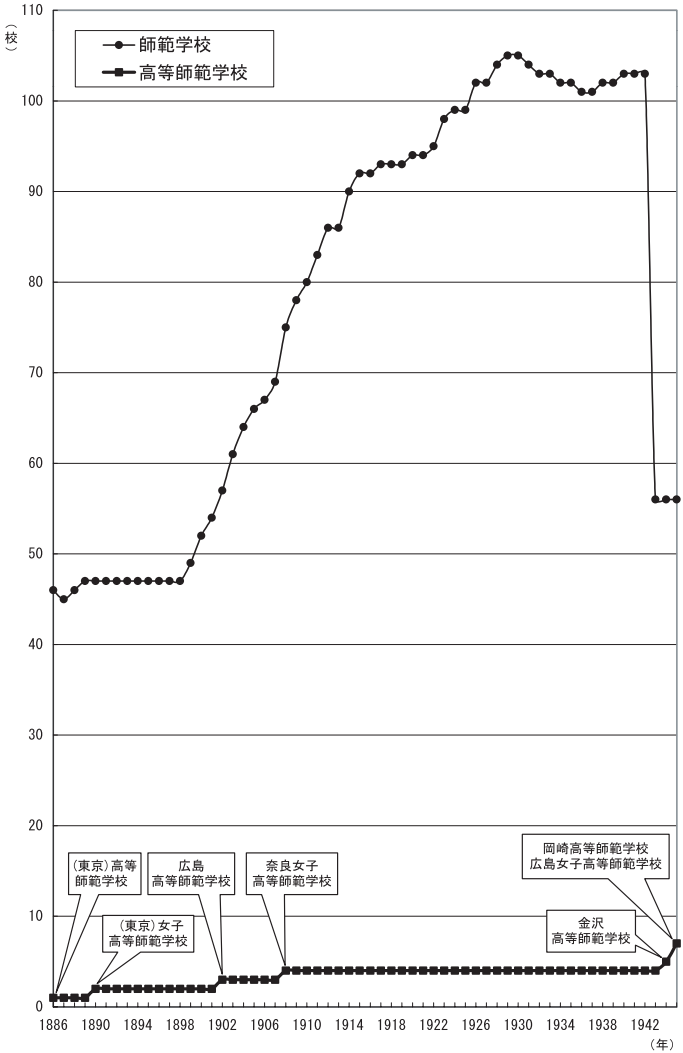


図１　師範学校・高等師範学校数の推移

◆数少ない高等師範学校

図1でわかるように、戦前全体を通じて中等学校教員を養成する高等師範学校は数校しか設置されませんでした。それらを設置年順にいうと、高等師範学校（一八八六年）、女子高等師範学校（一八九〇年）、広島高等師範学校（一九〇二年）、奈良女子高等師範学校（一九〇八年）、金沢高等師範学校（一九四四年）、岡崎高等師範学校・広島女子高等師範学校（一九四五年）の合計七校となります。

このうち、高等師範学校と女子高等師範学校については、広島高等師範学校と奈良女子高等師範学校が設置された際に、それぞれの名称が東京高等師範学校、東京女子師範学校に改められました。

◆中等教員の不足

さて、図1では詳細を読み取りづらいですが、奈良女子高師設置から金沢高師設置までの約三五年間、高等師範学校数は四校のままで推移しています。一方、同じ期間の中等学校における在学者数と教員数をグラフ化した図2をみると、前者が約一一倍に増加しているのに対して後者の増加は約七倍であることがわかります。つまり、中等学校在学者の急増に見合うだけの教員数の増加がみられず、教員不足の状態が続いていたのです。

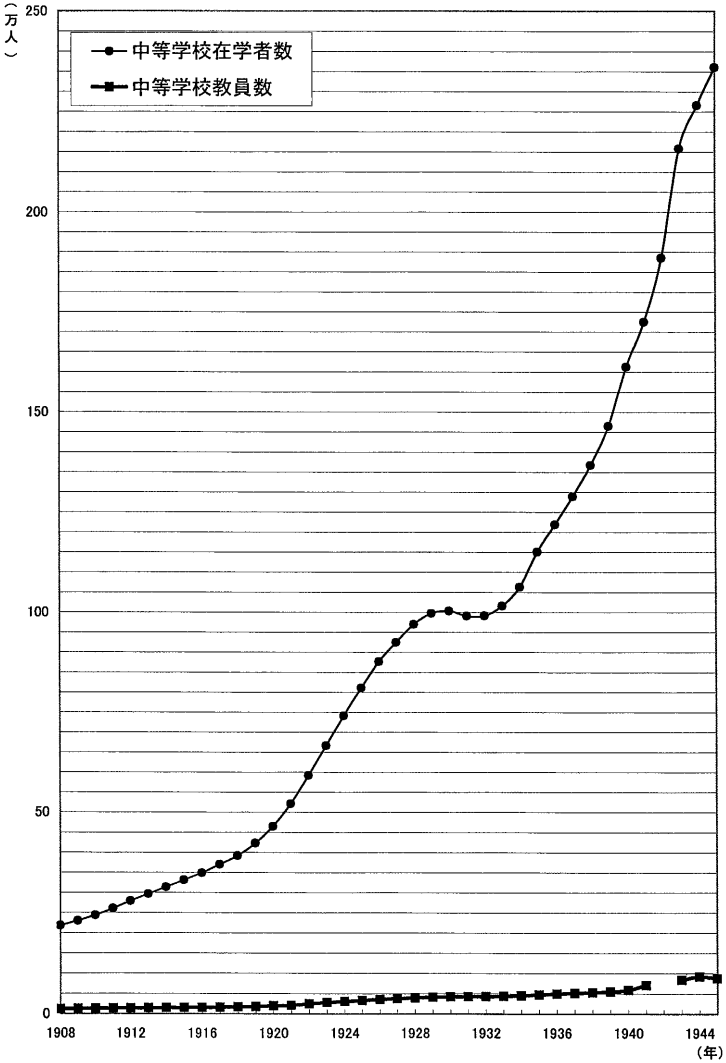


図２　中等学校の在学者数と教員数

この中等教員不足の問題に対して、文部省は、中等教員養成機関である高等師範学校・女子高等師範学校の増設という方法を採りませんでした。文部省では、臨時教員養成所の増設、「文検」と呼ばれた文部省検定試験の実施、私立大学卒業生への無試験検定認可などのいずれも応急的な措置によって、中等教員の不足問題に対応するという方法を採ったのでした。しかし、文部省の対応策は文字通り応急的な措置でしかなく、根本的な解決策としての高等師範学校の増設を望む声が次第に高まっていくのでした。

◆臨時教育会議答申と師範教育

一九一七年、第一次世界大戦後の教育政策を検討するため、内閣に臨時教育会議（一九一七～一九一九年）が設けられました。この臨時教育会議には計九回の諮問が行われ、その答申の内容は、初等教育から高等教育にまで及ぶ広範なものとなりました。一九一八年には、師範教育に関して、次のような内容の答申も出されました。

……高等師範学校ハ現在ノ如ク之ヲ特設シ其ノ職員ノ待遇ヲ高メ内容ノ改善ニ力ヲ用フルト共ニ……教授ヲ増員シ設備ヲ完全ナラシムルコト……師範学校、中学校、高等女学校ノ教員ノ需要ノ増加並有資格教員補充ノ必要ニ鑑ミ高等師範学校ノ収容力ノ増加……ヲ図

表１　高等師範学校設置を求める建議案（1925～1927年）

提出年	提案都市名
1925年 第50回帝国議会	①北海道函館市　②北海道札幌市　③山形県鶴岡市 ④岩手県盛岡市　⑤愛知県岡崎市　⑥石川県金沢市
1926年 第51回帝国議会	①山形県山形市　②福島県若松市
1927年 第52回帝国議会	①福島県郡山市　②宮城県仙台市　③熊本県熊本市 ④福岡県福岡市　⑤福井県福井市　⑥佐賀県佐賀市

（『岡崎高等師範学校五十年史』より作成）

ルコト……高等師範学校生徒ニ対スル給費ヲ復活スルコト

（『資料　臨時教育会議』）

ところで、この臨時教育会議答申の背景には、中等教員養成をめぐっての高等師範学校と帝国大学との関係についての論争的な問題がありました。それは、具体的には、帝国大学における中等教員養成を強化するとともに高等師範学校は廃止することの是非をめぐる問題でした。したがって、一九一八年の答申は、高等師範学校の特設という従来の方向を確認している点で、この論争に終止符を打ったとみることができます。

◆高師誘致運動ブーム

これまでに述べた中等教員の不足問題と臨時教育審議会の答申は、結果的に高等師範学校の増設運動（＝誘致運

動）に拍車をかけることになりました。それは、一九二五年から一九二七年の三年間に、全国一四の都市が高等師範学校の誘致を内容とする建議案を帝国議会に提出しているという事実からも理解できると思います（表1参照）。

本書のテーマである岡崎高等師範学校についても、こうした誘致運動ブームに乗る形でさまざまな活動が行われました。その詳細については、次章で述べることにします。

二　創設の経緯―岡崎市による設置運動

◆二〇年にわたる設置運動

岡崎高等師範学校は一九四五（昭和二〇）年に創設されましたが、その設置に至るまでには断続的に二〇年の歳月が費やされました。最初の試みは一九二五年のことで、前章で述べたいわゆる高師誘致運動のブームにおける帝国議会への建議案の提出でした。そして、次の試みは、その翌年における帝国議会への請願の提出です。

◆一九二五年の建議

岡崎高等師範学校の創設に向けた運動は、一九二五年にまでさかのぼることができます。すなわち、同年三月二四日、岡崎市出身の衆議院議員である近藤重三郎が帝国議会へ提出した建議案「岡崎市ニ高等師範学校設置ニ関スル建議案」がそのはじまりです。同建議案の理由書を次に引用しておきます。

今ヤ国運ノ伸張ニ伴ヒ堅実ナル中等国民ヲ要求スルコトノ急ナルニ鑑ミ之カ教養ノ任ニ当ルヘキ優秀ナル中等学校教員ノ養成ヲ切実ニ感スルモノアリ然ルニ東海道地方ニ之カ機関タル高等師範学校ノ設置ナキハ甚タ遺憾トスル所ナリ而シテ吾人ハ之ヲ愛知県岡崎市ニ設置ヲ要望スル所以ハ由来同市ハ東海道ノ要衝ニ位シ気候温和風光明媚加フルニ往昔堅実ナル三河武士輩出ノ地トシテ今尚其ノ遺風ヲ存シ質素ナル風俗ト淳朴ナル民情トハ最高等師範教育機関ノ好適地ナルコトヲ確信ス是レ本案ヲ提出スル所以ナリ

（第五〇回帝国議会衆議院議事速記録より）

一般に、戦前における師範教育では、普通教育とは異なった独特の制度（公費による養成、全寮制による兵営的訓練など）が用意され、いわゆる三気質（順良・信愛・威重）の養成がめ

ざされました。この理由書では、「気候温和」「風光明媚」「質素ナル風俗」「淳朴ナル民情」を兼ね備えた岡崎市こそが三気質養成をめざす師範教育の場にふさわしいということが主張されているのです。

この建議案は、その日（三月二四日）のうちに「高等師範学校設置ニ関スル委員会」へ付託され、同委員会で「本院ニ於テ可決スヘキモノトス」との結論を得て、同日に可決されました。しかし、そのときの政府の対応は消極的なもので、各地から建議案が出されたことに対して、中等教員養成に関する国民の強い要求があることを認めながらも、「今暫ク政府ノ最後ノ決心ガ出来マスマデオ待チヲ願ヒタイ」というものでした。

◆一九二六年の請願

翌一九二六年、今度は、近藤衆議院議員を介して、本多敏樹岡崎市長ほか三〇名による「岡崎市ニ高等師範学校設置ノ請願」が帝国議会へ提出されました。この請願では、前年の建議案理由書にあった「三河武士輩出…」という部分を削除しながらも、気候・環境・民情の面から岡崎市が好適地であるとする一方で、新たに前年五月に実現した男子普通選挙制度と関連づける形で、「堅実ナル中等国民ノ養成」の必要性を訴える内容となっていました。

岡崎市によるこの請願は、請願委員会で可決された後に衆議院でも採択されましたが、結局

は実現しませんでした。その理由は、一九二三年九月に起こった関東大震災後の復興費の激増によって国家財政が逼迫していたことなどから、採択事項の実施が見送られたためでした。

以上のように、岡崎市では二度にわたって高等師範学校の設置運動を行いましたが、いずれも実現には至りませんでした。しかし、高等師範学校の誘致を実現できなかったのは岡崎市だけではなく、いわゆる高師誘致ブームを形作った**表1**に掲げたすべての都市においても同様なことでした。結局、**図1**に示したように、奈良女子高等師範学校の設置（一九〇七年）以降一九四〇年代までの間、高等師範学校は一校も増設されなかったのでした。

◆金沢高等師範学校の創設

すでに述べたように、一九二五年の帝国議会に岡崎市が高等師範学校設置を求める建議案を提出した際、岡崎市のほかにも五つの都市から同様の建議が出されており、石川県金沢市もその一つでした。

金沢市では、明治期から北陸帝国大学の設置を求める運動が行われていましたが、大正期に入っても実現に至りませんでした。その一方で、大正期には、全国的に中等学校への入学者数が急増し、中等学校教員、とりわけ理科系の教員が不足するという状況がありました。そうした状況にあって金沢市では、一九二三年に第四高等学校に臨時教員養成所が併置され、理科系

金沢高師の第１回入学式（『金沢大学　写真で見る50年』より）

を中心とする中等学校教員の短期間での養成が行われていました。その後、昭和期に入ってからは、なかなか実現しない北陸帝国大学の設立に先立って、まずは高等師範学校を設置しようという声が高まったとされています。

金沢市における高等師範学校の誘致活動は、一九四〇年以降、急速に展開されました。すなわち同年、のちに金沢高等師範学校の教頭に就任することになる第四高等学校教授の樫本竹治が、北陸地区に中等教員養成機関を設ける必要性を文部省に訴えました。二年後の一九四二年夏、金沢で中等教育理化学協会の年会が開催された際、樫本は、文部省に高等師範学校増設の意向があることを知り、ただちに金沢市長に対して誘致運動を進言したとされています。これを受けて金沢市では、新築したばかりの同市中

村町の小学校校舎の提供を申し出るなどの誘致運動を展開しました。その結果、一九四三年末には、理科系教員養成の課程のみを置く金沢高等師範学校の創設費が翌年度の国家予算に計上され、一九四四年四月に金沢高師が創設されました。おそらく、この金沢高等師範学校の創設は、約二〇年前から同じく高師誘致をめざしていた岡崎市に少なからぬ衝撃を与えたものと推測できます。

◆本格的な戦時体制への移行

ところで、金沢高等師範学校の創設が進められている時期は、ちょうど日本が本格的な戦時体制下に移行する時期でもありました。

一九四三年一〇月一二日、政府は、国民学校から大学・専門学校までのすべての教育機関を対象とした「教育ニ関スル戦時非常措置方策」を閣議決定し、同月二三日にはその閣議決定に基づく「教育ニ関スル戦時非常措置ニ関スル件」が全国に通牒されました。その「戦時非常措置」では、例えば、理科系の大学や専門学校の整備拡充を図るとともに文科系の大学や専門学校を理科系に転換することが決定されました。また、中等教育段階では、工業学校・農業学校・女子商業学校の拡充がめざされ、既存の男子商業学校については工業学校・農業学校・女子商業学校に転換するものを除いて整理縮小することが決定されました。

金沢高等師範学校が理科系教員養成課程のみを置く形になっていたのは、こうした国の方針に基づくものであったといえます。

◆三度目の岡崎高師設置運動

一方、岡崎市による高等師範学校設置運動は、金沢高等師範学校の創設を先例としながら、一九四三年以降に新たな展開をみることになりました。

第一は、先の通牒「教育ニ関スル戦時非常措置ニ関スル件」によるもので、岡崎市立岡崎商業学校が廃止されて市立工業学校に転換されることになりました。しかし、もともと岡崎市には愛知県立工業学校が置かれていたので、同一市内に二つの工業学校が存在することとなり、岡崎市にとって望ましいことではありませんでした。そこで、岡崎市が愛知県との交渉を行った結果、将来的には市立工業学校を県立工業学校に合併して一校とすることが内定しました。

この合併案は、岡崎高等師範学校の誘致活動を再び盛り上げることになりました。両校の合併によって市立工業学校の敷地・校舎が余ることになり、その敷地・校舎を利用すれば金沢市のように高等師範学校を誘致することが可能となるからでした。この点に関して、のちに岡崎高師教授となった七里公章は、次のように回顧しています。

市立商業を市立工業に切り替えて、市内に市立と県立の二つの工業を作り、更らにそれを一校に合併しても、断じて軍需工場に明け渡さなかったところに、岡崎市の面目躍如たるものゝあることを筆者は愉快に思うのである。

（七里公章「創立を回顧して」『岡崎高等師範学校誌』）

第二は、一九四四年七月に「科学技術者動員計画設定要綱」が閣議決定されたことによるものでした。この要綱には、航空機の生産増強のために「理科系学校ノ卒業者ノ増加ヲ図」るとともに、「重要ナル工場事業場並ニ研究施設等ニ於ケル中堅科学技術者ノ短期養成ヲ図ル」ことなどが盛り込まれていました。

本来、この要綱は国の政策全体を対象とするものであって、必ずしも師範教育の拡充を内容とするものではありませんでした。しかし、岡崎市側は、「理科系学校ノ卒業者ノ増加」という趣旨に応じる形として、理科系学科だけの高等師範学校設置をめざす方針を採ったのでした。

◆岡崎市会への緊急提案①―国に対する寄附

一九四四年一〇月二七日、岡崎市当局は、岡崎高等師範学校の誘致に関連する二つの議案を岡崎市会に緊急提出しました。その一つは、第四三号議案「予算外ノ義務負担ヲ為スノ件」で、

表２　岡崎高師創設までの主な動き

年　月	事　　項
1925.3	近藤重三郎衆議院議員が「岡崎市ニ高等師範学校設置ニ関スル建議案」を第50回帝国議会へ提出。
1926.3	本多敏樹岡崎市長ほか30名が「岡崎市ニ高等師範学校設置ノ請願」を第51回帝国議会へ提出。
1943.10	「教育ニ関スル戦時非常措置方策」の閣議決定および「教育ニ関スル戦時非常措置ニ関スル件」（発国第474号）の通牒。
1944.7	「科学技術者動員計画設定要綱」の閣議決定。
1944.10	岡崎市会が「予算外ノ義務負担ヲ為スノ件」（第43号議案：国に対する寄附）および「予算外ノ義務負担ヲ為スノ件」（第44号議案：愛知県に対する寄附）を可決。
1945.2	「岡崎市に高等師範学校を設立すべき建議案」が第86回帝国議会を通過。
1945.3	勅令第131号により岡崎高等師範学校設置が決定。
1945.4	文部省令第７号により岡崎高等師範学校に理科の学科設置。

次のようなものでした。

昭和十九年第四三号議案

予算外ノ義務負担ヲ為スノ件

本市ニ高等師範学校設立セラルヽ場合ニ於テハ之ニ充当スル為岡崎市立工業学校ヲ廃止ノ上左記ノ通リ国ニ対シ寄附スルモノトス

昭和十九年十月二十七日緊急提出

岡崎市長　菅　野　経　三　郎

記

一、土地　岡崎市明大寺町字栗林地内
　岡崎市立工業学校敷地
　総坪数　一三、四九六坪（内訳別紙参照―略）

二、建物　岡崎市明大寺町字栗林地内
　岡崎市立工業学校々舎
　総建坪　一、二九一坪二合（内訳別紙参照―略）

三、備品　別紙内訳書ノ通（略）

この議案は、二つの工業学校の合併に伴って利用可能となる市立工業学校の敷地・校舎について、岡崎市への高等師範学校の設置を条件として国に寄附するという内容になっています。そこには、先に述べたように、商業学校の転換問題を高師誘致の運動に転化させようとする岡崎市の姿勢が読み取れると思います。

◆岡崎市会への緊急提案②―愛知県に対する寄附

次に、もう一つの第四四号議案「予算外ノ義務負担ヲ為スノ件」についてです。この議案は、市立工業学校の敷地・校舎を利用して高等師範学校が設置されることを前提として、岡崎市が愛知県に対して寄附を行うという内容で、次のようなものでした。

昭和十九年第四四号議案

予算外ノ義務負担ヲ為スノ件

岡崎市立工業学校ノ校地校舎ヲ以テ高等師範学校ヲ設立セラル、場合ニ於テハ現岡崎市立工業学校ノ生徒及将来入学セシムベキ生徒ヲ愛知県岡崎工業学校ヘ収容サラレ度ニ付之ニ要ス

ル経費トシテ本市ハ左記ノ通リ本県ニ対シ寄附ヲスルモノトス

昭和十九年十月二十七日緊急提出

岡崎市長　菅　野　経　三　郎

記

一、金四拾五万円也　自昭和二十年度　至仝　二十二年度　三ヶ年度間分割寄附金

但現物寄附ノ分ニ付テハ右金額ヨリ其ノ相当額ヲ控除スルモノトス

岡崎市会では、これら二つの緊急議案が修正なく即日可決されました。そして、翌二八日には文部大臣あてに寄附採納願が提出されるとともに、愛知県に対しても同様の申請が行われました。

以上、本章では、高等師範学校の誘致に向けた岡崎市の取り組みについて述べてきました。およそ二〇年の歳月をかけた岡崎市の誘致活動は、三度目の試みでようやく実現に向けた具体的な段階にまでたどり着いたといえます（表2参照）。その際、金沢市における高師誘致の事例から得たことも見逃すことはできませんが、それ以上に地元岡崎市の教育・文化に対する熱意が大きな原動力になったことは明らかだと思います。

三　岡崎高等師範学校の誕生と終戦

岡崎高等師範学校正面
（都築亨氏所蔵）

◆岡崎高師設置の閣議決定

岡崎市会が、一九四四（昭和一九）年一〇月に二つの緊急議案を可決したのち、岡崎高師の設置が実現するかどうかは政府の判断を待つしかありませんでした。当時、戦時体制下にあって、大蔵省は新規の要求を一切認めない方針を打ち出しており、しかも次年度予算の編成を目前に控えた時期での要求となるため、文部省・大蔵省との折衝は非常に困難を極めたものであったと思われます。この点に関して、先にも取り上げた七里公章「創立を回顧して」では、次のように記されています。

……新規事業は一切認可出来ない当時の情勢であるから、これが実現にはめまぐるしい政治的折衝が初った。政府が国会に予算案を提出するまでには、何程の時日も残されていない。わずかの期間に文部省議を経て大蔵省に折衝せねばならぬ。この間の消息は相当混雑した紆余曲折を物語るものがある……

（七里公章「創立を回顧して」『岡崎高等師範学校誌』）

その後、一九四五年二月に「岡崎市に高等師範学校を設立すべき建議案」が帝国議会に提出・可決され、同年三月一九日には、岡崎市・愛知県など関係者の努力が実って、ようやく岡崎高等師範学校の設置が閣議にかけられることになりました。国立公文書館には、その閣議に提出されたと考えられる次のような「岡崎高等師範学校設置要項」が保管されています。

岡崎高等師範学校設置要項

一、昭和二十年度ニ於テ岡崎高等師範学校ヲ左ニ依リ設置スルコト

1、学科ハ理科ノミヲ置クコト

2、当分ノ内代用附属学校ヲ置クコト

3、校地、校舎ハ既設ノ設備ヲ利用スルコト

4、教授用設備ハ昭和二十年度ヨリ昭和二十三年度ニ至ル四ヶ年間ニ整備スルコト

二、岡崎高等師範学校ノ編成ハ左ノ如クスルコト

学科	学級数					生徒数					備考
	一年	二年	三年	四年	計	一年	二年	三年	四年	計	
第一部（数学）	一	一	一	一	一	三五	三五	三五	三五	一四〇	
第二部（物象）	二	二	二	二	二	七〇	七〇	七〇	七〇	二八〇	
第三部（生物）	一	一	一	一	一	三五	三五	三五	三五	一四〇	
計	四	四	四	四	一六	一四〇	一四〇	一四〇	一四〇	五六〇	

三、岡崎高等師範学校生徒ニハ年額三〇〇円ノ学資ヲ支給スルコト

その閣議では、この設置要項に基づく岡崎高等師範学校の設置が決定されました。そして、同月二八日には「高等師範学校官制中改正」（勅令一三一号）が公布され、岡崎高等師範学校は広島高等女子師範学校とともに、翌四月一日に創設されることになりました。岡崎高師の開校直後のようすについては、七里が次のように回顧しています。

……ここにわが高師が東海中部日本に呱々の声をあげたのである。同時に本校の予定地

岡崎市明大寺町栗林地内（通称芦池橋）の市立工業学校の校門に市立工業学校、市立商業学校の門札と肩をならべて岡崎高等師範学校の新しい看板が掲げられた。四月一日の官報に、初代校長として水野敏雄、教授松原益太、関野豊三、並びに筆者の四名が発令され、……四人打ち揃って、われわれの校舎に当てられている市立工業学校を訪れたが、校庭には八重桜が所狭しと咲きみだれ、うらゝかな春の光りに映えて、ちらりほらり散り初めていた。一、二年度までは生徒の収容は出来ても、やがて手狭まになるこじんまりとした校舎である。栗林山林の小高い丘に、新装をこらした白亜の殿堂がそびえ立つ日を夢見て、新らしい希望に胸の高鳴るをおぼえた。

（七里公章「創立を回顧して」『岡崎高等師範学校誌』）

◆岡崎高師の特質

ここで、改めて「岡崎高等師範学校設置要項」をもとに、戦時体制下に創設された岡崎高師の特質を整理しておきたいと思います。

第一に、岡崎高師には設置された学科は理科のみで、前年度に創設された金沢高師と同じく、文科は設けられませんでした。もっとも、岡崎市自体が理科のみの設置を掲げて高師誘致を行ったという経緯からすれば、当然の結果であるといえます。その一方で、理科のみの高等師

範学校であることは、金沢高師とともに、岡崎高師が紛れもなく戦時体制下の国策に合致させることによって創設が実現した事例であることを示しているといえるでしょう。

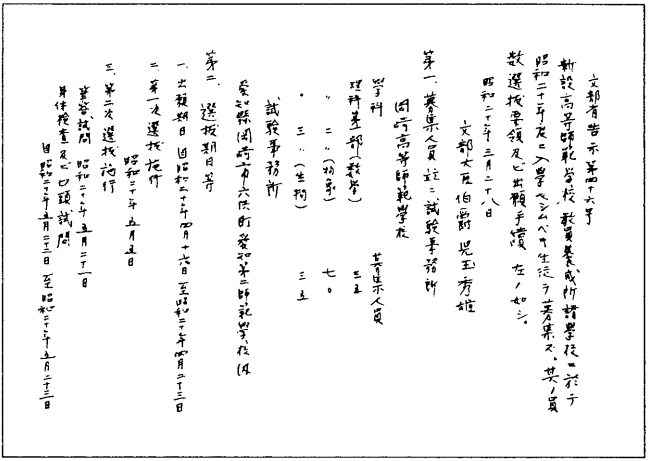
第二に、岡崎高師では、正規の附属学校が認められず「当分ノ内代用附属学校」が置かれることとされ、また、校地・校舎についても市立工業学校のものをそのまま利用することとされました。さらに、教授用の設備については、四ヵ年かけて徐々に整備されるというものでした。

こうした点から考えると、岡崎高師の設置内容は、「戦時体制下における教育費の切り詰めを反映して、国策に対応した、しかも、もっとも安上がりな道が選択された」（『名古屋大学五十年史』通史一）ことの結果であるといわざるを得ないのかもしれません。

◆創設当初のスタッフ

「岡崎高等師範学校設置要項」とともに国立公文書館に保管されている資料に、岡崎高師の教官配当を示す表と毎週教授時数・所要教官数を示す表があります。これらの資料によると、創設初年度には教授一三名、助教授四名、助手一名の計一八名の教官が置かれることになっています。

しかし、先に紹介した七里の回想にあるように、四月一日付けで着任した教官は水野敏雄校長のほか、松原益太・関野豊三・七里公章の三教授のみでした。その後、五月初めまでに渡辺


文部省告示第四十六号
新設高等師範学校、教員養成所、講習科ニ於テ
昭和二十年度ニ入学ベシムベキ生徒ヲ募集ス、其ノ員
数選抜要領及ビ出願手続左ノ如シ、
昭和二十年三月二十八日
文部大臣 伯爵 児玉秀雄
第一、募集人員 並ニ試験事務所
岡崎高等師範学校
学科 募集人員
理科第一部（数学） 三五
〃 二〃（物理） 七〇
〃 三〃（生物） 三五
試験事務所
愛知県岡崎市六供町愛知第二師範学校内
第二、選抜期日等
一、出願期日 自昭和二十年四月十六日 至昭和二十年四月二十三日
二、第一次選抜 施行
昭和二十年五月五日
三、第二次選抜 施行
実技試験 昭和二十年五月二十一日
身体検査及ビ口頭試問
自昭和二十年五月二十二日 至昭和二十年五月二十三日

第１回入試要項―物理科１回生の牛山氏が筆写したもの
（『岡崎高等師範学校五十年誌』より）

実・浅井浅一の教官二名が着任して、次第に教授陣も充実してきましたが、先の資料にある教官定員を満たすまでには至りませんでした。

◆入学者募集の準備

岡崎高師の第一回入学者募集に関する準備は、同校創設以前の一九四五年二月下旬ごろから始められました。その頃、愛知県第二師範学校（岡崎市六供町）内に設けられた岡崎高等師範学校設立事務所で準備が行われたのでした。七里公章の回想によると、設立事務所とはいっても机一脚と火鉢一個がある程度の部屋で、しかも、戦時下の物資不足のため入試要項の印刷さえ十分に行えなかったことがわかります。

……戦争末期、極度に物資不足の時でも

あって、募集要綱の用紙すら入手容易でない。印刷所も表口からはたのめない。最初五〇〇〇枚を印刷に附したが、要綱送れの申込みは次ぎから次ぎに殺到、次に三〇〇〇枚、計八〇〇〇枚、なお足らぬ、遂に印刷屋にも油が切れて断られる。小林老人（引用者注―募集事務の担当者）には甚だ御苦労であったがあと数千枚はガリバンでプリントしてもらうと言う始末。第一回入学者の中にはガリバンの要綱をもらった記憶があるだろう。

（七里公章「創立を回顧して」『岡崎高等師範学校誌』）

なお、受験希望者の中には、入試要項を入手することができないため、岡崎市の試験事務所に出向いて同所に掲示してあった要項を筆写した者もいたようです。

◆第一回入学試験

岡崎高師への入学志願者は全国各地から殺到し、入学定員一四〇名に対して三二一四名もの出願がありました（**表3**参照）。競争倍率がおよそ二三倍ですから、この数字からも岡崎高師の人気が非常に高かったことが理解できると思います。

第一回入学試験では、第一次選抜として内申書による査定が行われ、その結果二九九名が第二次選抜に挑むことになりました。そして、第二次選抜は、口頭試問・筆記試験・身体検査が

表3　岡崎高師第一回入学試験志願者数等（1945年度）

学　　科	志願者（人）	入学定員（人）	倍　率
理科第一部（数学）	1,007	35	28.77
理科第二部（物象）	1,205	70	17.21
理科第三部（生物）	1,002	35	28.63
計	3,214	140	22.96

（『岡崎高等師範学校誌』より作成）

五月一三日から三日間にわたって実施されています。

第二次選抜の結果は、五月一五日に発表されました。ただし、入学許可を得た者の数については、戦災で資料が失われたため正確にはわかりませんが、七里の回想によると「定員より多少上回った」とされ、また別の資料では約一五〇名との記述もみられます。なお、入学者の出身地は、全国三四都府県に及んだとされています。

◆入学式直前の空襲

第一回入学試験の合格発表からちょうど一週間後にあたる一九四五年五月二二日、「戦時教育令」（勅令三二〇号）が公布されました。この勅令によって、すべての学徒は、「食糧増産、軍需生産、防空防衛、重要研究等戦時ニ緊切ナル要務」に総動員されることになり、そのため「学校毎ニ教職員及学徒ヲ以テ学徒隊ヲ組織スル」ことなどが定められました。

その結果、入学試験に合格したばかりの全生徒は、入学式を行

う以前の同年六月一三日に学徒隊を編成しています。そして、七月二日には第一回生が学校に集まり、自宅通学生以外の生徒には校内の教室が臨時の宿舎として用意されました。岡崎高師教授であった関野豊三は、その当時の生徒の生活について、次のように回想しています。

生徒の日課は教室及寮の設営・講話・座談・食糧の運搬・炊事の手伝など全く戦時的日課であったが、空腹と疲労とで張りの足らない顔色は見るものをして可なり不安を感じせしめた。……街の映画場は殆んど閉ざされ読むものはないし、昼間の作業的日課を終えてもその夜を癒すべきたのしみもなかった。

（関野豊三「草創二年間」『岡崎高等師範学校誌』）

七月二〇日、午前零時過ぎから数時間、岡崎市は米軍による空襲を受けました。幸いなことに、動員準備のため生徒の大半が帰省していたこともあって岡崎高師関係者が命を失うことはありませんでした。しかし、爆弾三〇〇発余といわれる空襲によって、校舎のほとんどは焼失してしまったのです。豊野は、その時のようすを次のように回顧しています。

暁の白む頃二十三名の生徒と未だ濛々たる火煙の跡に立った。入学式もなく正式に発足

しない中に、跡方なくやけたのである。僅かに丘の下近くの便所の一角と渡り廊下が残ったのみであった。あれほど校舎を覆っていた樹々は幹を残したまゝ丸坊主でくすぶっていた。

（関野豊三「草創二年間」『岡崎高等師範学校誌』）

一夜にして校舎を失った岡崎高師では、入学式を控えて、新たな校舎を早急に探さなければなりませんでした。その後、七月二三日には岡崎市内の六名国民学校の一室を借り受けて、とりあえず仮事務所が設けられました。また同時に、仮校舎を三菱重工業針崎工場青年学校に、生徒宿舎を市内針崎町の勝鬘寺内にそれぞれ移転することが決まりました。

◆入学直後の終戦

岡崎高師の第一回入学式は、一九四五年七月三〇日に行われました。入学式は、生徒の動員先となる西加茂郡の豊田自動車挙母工場青年学校の教室で行われました。関野は、入学式のようすをこのように回想しています。

学校長の式辞の最中、すぐ近くの飛行場に幾度も爆弾が落され、その都度式辞の声は

きゝとれなかった。屋根をかすめて飛び去る飛行機に幾度も魂を冷したが学校長は教育の重要性とその使命について悠然として極めて平静に的確に説かれるところがあった。

（関野豊三「草創二年間」『岡崎高等師範学校誌』）

入学式の三日後、八月二日には同工場において動員生徒の入所式が行われました。動員作業は同月四日から開始され、「理科の生徒としての学習内容と関係のある自動車の構造機能の講義を隔日に組んだ作業であった」（関野「草創二年間」）とされています。

動員作業と講義が交互に行われる中、八月一二日には簡素ながらも岡崎高師の開校式が行われました。しかし、その三日後（八月一五日）には、終戦の詔勅が出されて終戦を迎えたのでした。

四　終戦直後の岡崎高師―豊川市への移転―

◆ゼロからの再出発

一九四五（昭和二〇）年八月一五日の終戦を迎えたとき、すでに空襲で校舎と宿舎のすべてを焼失していた岡崎高師は、文字通り「ゼロからの再出発」をする以外に方法はありませんでした。初代校長の水野敏雄は、その当時を振り返って「わが校は孤立無援、微力ながらお互いの力の限りを出しあって、開校怒々の難局を乗り超えようとする悲壮な気魄が溢れていた」（水野敏雄「創設のころの想い出」『岡崎港師範学校―創立三十周年誌』）と回想していますが、現実は想像以上に苛酷であったといえます。

すでに述べたように、空襲による被災後、三菱重工業針崎工場青年学校を仮校舎とし、勝鬘寺を宿舎としていました。終戦後、その宿舎は振風寮と命名され、九月二八日には入寮式が行われ、十月一日には仮校舎で始業式が行われました。

……入学後始めて学校生活らしい授業の快味を得たようであった。校舎も工場の地域の

一区画をなし学校的雰囲気がたゞようていた。ここできく時刻を知らす振鈴、教室からもれる講義の声、休憩時に悠々と裏山に日向ぼっこをする生徒の姿などにも学校というものゝ平常時が日々に回復しつゝあるのが感ぜられた。校長室・事務所・応接室も整えられ、事務的処理も軌道に乗ってきた。

（関野豊三「草創二年間」『岡崎高等師範学校誌』）

終戦直後の再出発のようすについて、関野はこのように回想しています。

◆本格的な移転先を求めて

岡崎高師では、仮校舎での教育活動が徐々に進展するにつれて、本格的な校地・校舎の確保が緊急の課題となってきました。岡崎高師としては、創設の経緯やその校名から考えても、岡崎市内に本格的な移転先を確保するために全力を傾けました。しかし、残念なことに岡崎市内では高等師範学校にふさわしい風格を備えた校地・校舎を見つけることができませんでした。

そこで、仕方なく岡崎市外にも範囲を拡大させた結果、豊川市牛久保町中代田の豊川海軍工廠工員養成所とその宿舎が移転先候補にあがってきました。当初、水野敏雄校長は、岡崎市との関係をさしおいて移転先を豊川の地に求めることを躊躇しました。しかし、早急に移転先を

決定しなければならない事情もあって、豊川移転に向けた準備が始められたのが一九四五年一〇月下旬のことでした。

◆豊川市への移転

一九四五年一一月二四日、名古屋軍政部から豊川海軍工廠関係施設の使用許可が出されました。当時、豊川市では、戦後再建計画として、愛知第二師範学校男子部の豊川誘致をめざすとともに、市立病院と市立農業学校の設置を構想していました。とくに市立農業学校の新設については豊川市会においてほぼ決定されており、豊川海軍工廠工員養成所の利用が見込まれていたため、岡崎高師の移転に際しての豊川市側の尽力はきわめて大きかったといえます。

岡崎高師の豊川移転は、同年一二月九日に行われました。移転後の校舎には旧工員養成所建物（正式名称は「豊川海軍工廠第二工員養成所」）が利用され、振風寮には工員宿舎が利用されました。この移転に先立って、戦災で荒れ果て尽くして「化物屋敷」のようであった校舎を修復・設営するため、第一期生四組が一週間交代制で製炭・校舎設営・清掃の作業を行ったといわれています。

振風寮祭（都築亨氏所蔵）

◆振風寮

ここで、振風寮について簡単に述べておきたいと思います。一九四六年、振風寮では、従来の舎監制度を改めて自治寮へと移行しました。ある岡崎高師一回生は、「戦後の時勢の赴くままとはいえ、当時一回生だけで未組織の学生が、教員養成学校制度という、管理的色彩の強い古い勢力に対して、断固反対を試ろみた」結果が、自治寮への移行であったと回想しています。

当時の記録によると、一九四六年二月二日に振風寮文化部が「自治に就いて」と題する討論会を開催し、自治的な機運が大きくなったとされています。その後、同月一一日には、学問の自由その他四カ条からなる決議文を校長へ提出し、その翌日から四八時間の同盟休校（聴講拒否）を行っています。

ところで、振風寮での学生生活はどのようなものであったのでしょうか。ここでは、『岡崎高等師範学校五十年誌』の中から、そのようすを紹介しておきます。

だべりの中で育つ　振風寮は「だべりの寮」でもあった。教科書はそっちのけでよくだべった。毎日、毎日よくも話があると思われる位よくだべったものだ。書物の話が出る、歴史上の人物の話が出る、恥ずかしいからその場では知った振りをして相槌を打って過ごし、後で勉強したこともある。だべりで啓発された。

ファイヤーストーム　空腹の振風寮生にもメランコリーはとりつく。板塀が燃える。襖が燃える。突発的である。裸の若者が輪をつくる。……口上が朗々と響く。一節ごとに呼応する。乱舞がはじまる。火勢が衰えるころには、肉体も精神も燃え尽きる。ただ空虚と昇華と残骸が寮庭に残る。何も語らずに夜の帳が降りる。襖まで燃やしてしまった反省が、次の日に残る。自然発生的なストームは時折、振風寮の空をこがした。

訪問ストーム　玄関前の電源が切られる。〝ウォー〟という訪問嵐が廊下になだれこむ。床下が割れんばかりの踊り狂いながら「デカンショ、デカンショ」が通り過ぎてゆく。

デカルト、カント、ショーペンハウエルの前に訪問を受けた側はただ傍観するのみでる。勢い余った嵐の余波が近隣の教授宅まで襲いかかる。「ごくろうさん、ごくろうさん。」の励ましの声が玄関口でかかる。学校による規制もなく、叱責もなく、自主規制を厳にした訪問ストームであった。

「実力」という名の夜食　誰が名付けたか、振風寮には「実力」という名の生命保持手段が存在していた。学問的実力でなく、正に「生きる」という動物的本能に根ざした「食」の供給であった。雑炊やスイトンや、サツマイモや、キューバ糖では夜を徹してのダベリのエネルギーを保つことはできない。夜半になると飯ごうで米が研がれる。廊下や窓際で七輪の火が燃える。薪は特別購入ではなく、寮の周辺で調達したものである。銀シャリと梅干しや漬物くらいが空腹を満たした。米は親が工面してくれた貴重なものであった。農家出身であろうと、非農家出身であろうと乏しさを分かちあって空腹を満たした。実力につながる心の連帯は野性的奪い合い、いがみ合い、弱肉強食をすべて否定した。

机がわりの弾薬箱：戦後、振風寮で使われていました。「岡崎高等師範学校／番号５」というラベルが貼られています。もとは豊川海軍工廠で生産した機銃弾を運ぶためのものが、戦後転用されたものです。中にノート類などを入れ、ふたが机の天板となりました。
丸イス：岡崎高師の化学実験室で使用されたもので、その後東山キャンパスの旧教養部時代まで使用されました。「岡崎高師」の焼印がみられます。（以上、加藤貞夫氏提供）
定規：「岡高師教務課用」と書かれ、裏には「工員養成所」の焼印もあります（教育発達科学研究科提供）。

（名大史ブックレット６より転載）

五　名古屋大学への包括

◆新学制への移行

一九四七（昭和二二）年三月三一日、教育基本法（法律二五号）と学校教育法（法律二六号）が公布・施行されました。前者は、戦前において教育の最高基準とされた教育勅語（一八九〇年発布。正式には「教育に関する勅語」）に代わる戦後の教育の最高法規として定められたもので、今日においても、日本国憲法の附属法律としての性質を持つものと理解されています。また、後者は、憲法と教育基本法が示した教育理念を受けて、いわゆる六・三・三制といわれる学校教育制度の基本を定めた法律です。戦後、日本では、この学校教育法の施行によって新学制への切り替えが行われました。

ただし、新学制への移行は、実際には経過措置を伴いながら段階的に進められました。特に、本章で取り上げる旧制の官立高等教育諸機関―名古屋（帝国）大学・岡崎高等師範学校など―については、一九四九年の国立学校設置法の公布・施行によって事実上の新制への移行が行われました。

◆新制名古屋大学への準備

一九三九年四月一日に医学部・理工学部の二学部構成で創設された名古屋帝国大学は、一九四二年度には医学部・工学部・理学部の三学部体制になりました。戦前において、「帝国大学」とは官立の総合大学を意味しますが、一般的には「総合大学＝文科系・理科系両方の学部を備えた大学」という認識が強くありました。その点に照らすと、名古屋帝国大学は理科系学部のみで構成された、いわば未完成の帝国大学との印象をぬぐえない状態で終戦を迎えたのでした。

戦後、先に述べた教育基本法・学校教育法の公布・施行に伴って、一九四七年一〇月一日にはすべての「帝国大学」は単に「大学」に改称されることになりました。これによって、名古屋帝国大学も名古屋大学へと改称されましたが、学校制度上はまだ新学制への移行が行われていなかったので旧制名古屋大学と呼んでいます。

ところで、旧制名古屋大学では、戦前からの総合大学構想をうけて、文科系三学部（文学部・法学部・経済学部）を創設するための新学部創設委員会を一九四七年一〇月に設置しました。最終的に、この新学部創設の取り組みは、一九四八年九月に旧制文学部と旧制法経学部の創設という形で実を結びます。この両学部の創設にあたっては、新学制下では整理・統合されることとなる旧制高等教育機関―第八高等学校と名古屋経済専門学校―が母体になりました。

一方、同じ時期に名古屋大学（旧制）では、一九四九年度からの国立新制大学の発足に向けた準備が進められていました。新制大学の設置は、各大学が作成する「設置認可申請書」の審査を経て行われることになっており、名古屋大学でも同申請書の作成が急ピッチで進められました。

◆名古屋大学教育学部の創設

一九四八年七月、新制大学の設置認可申請書の作成が最終的な段階を迎えていたとき、申請内容に大きな変更をもたらす出来事がありました。ＧＨＱ／ＳＣＡＰ（連合国軍最高司令官総司令部）が、日本の民主教育の強化のために旧帝国大学にも教育学部の設置を強く求めたことによって、緊急に開催された旧七帝国大学総長会議において教育学部の設置が決定されたのでした。

この会議において各大学の総長は、教育学部設置に関して消極的な態度を示しました。しかし、最終的には、ＣＩ＆Ｅ（民間情報教育局）が各総長の反対を抑える形で大阪大学を除く旧六帝国大学に教育学部の設置を約束させたのです。なお、名古屋大学については、会議の席上、田村春吉総長が、「岡崎高等師範学校を包括して、教育学部を創設する計画を進めている」との発言を行ったことが記録に残っています。実は、名古屋大学では、この総長会議が開催され

名城キャンパスの教育学部正面玄関

る以前の六月前後に、岡崎高師との事前協議を踏まえた上で、岡崎高師合併を視野に入れて文学部に教育学科を設置することを検討していました。ただし、それは、あくまでも教育学科の設置構想であって、教育学部設置構想ではありませんでした。

名古屋大学だけに限らず、旧帝国大学が教育学部の設置に消極的であった背景には、大学の学部を担うにふさわしい教官を確保することが困難であるという認識が各大学にあったといわれています。第一章で述べたように、戦前の学校制度において、師範学校は中等教育機関、高等師範学校は高等教育機関としてそれぞれ位置づけられていたことが、そうした認識を生んだといえます。

◆新制名古屋大学の発足

一九四九年五月三一日、国立学校設置法が公布・施行されて全国で六九校の国立新制大学が設置されました。これをうけて、同日付で文部省学校教育局長から「名古屋大学設置認可通知」が出され、教育学部・文学部・理学部・工学部・法経学部からなる新制名古屋大学が発足しました。なお、医学部については、修業年限の関係上、一九五一年度に新制学部へと切り替えられました。

また、新制名古屋大学の発足に際して、旧制の高等教育諸機関―名古屋大学（旧制）・第八高等学校・名古屋経済専門学校・岡崎高等師範学校等―が新制名古屋大学に包括されました。なお、この包括によって、岡崎高師は名古屋大学岡崎高等師範学校に改称されました。また、一九四九年七月一日には、新制名古屋大学の教養部（名古屋大学豊川分校）が岡崎高師に併置されることになり、同分校にはのちに三一六名の名大教養部学生が配置されました。

◆岡崎高師からみた新制名大への合流

以上、本章では名古屋大学の側からみた岡崎高等師範学校の包括の経緯について述べてきました。しかし当然のことながら、新学制への移行に際して、岡崎高師としての構想や取り組みが存在しました。以下では、その点に焦点を当ててみたいと思います。

一九四七年三月、岡崎市の学制改革委員会が、同市に幼稚園から大学までの教育機関を拡充・整備する方針を確認していました。その際、豊川市に移転していた岡崎高師や愛知第二師範学校の岡崎復帰を積極的に推進することもあわせて確認されています。また、この方針を実現するために岡崎市では、同年七月には竹内市長を会長とする「岡崎大学新設期成同盟」を結成しました。

一方、同じ時期、岡崎高師の教授会は、新学制への移行に際して大学への昇格をめざすことを決め、一九四七年六月には「大学建設部」という組織を設けています。岡崎高師では、一九四七年四月から新たに文科系学科（第一部・第三部）と正式な附属中学校を創設しており、本来の高等師範学校としての体裁を整えたことで、単独での大学昇格に期待を込めたのかもしれません。こうした動きについて、同月に岡崎高師校長に就任した松原益太は、次のように回想しています。

……新制度によって……従来の高等専門学校はその組織や設備の如何によっては単独で、または他と合併して綜合大学に昇格することができるようになった。……火災・敗戦・終戦と目まぐるしい変化を短い期間に経験し、しかも一部では廃校か存続かなどと噂された岡高師の不安は、上記両法案（引用者注―教育基本法案と学校教育法案）の成立によって

一挙に吹とんでしまったのである。

（松原益太「大学建設運動と名大との合併問題」『岡崎高等師範学校―創立三十周年誌』）

◆大学建設運動の顛末

岡崎高師における大学建設部の大学昇格運動は、その後、高師在校生を中心とした資金獲得運動への広がりをみせながら、一九四八年一月には父母・教職員を巻き込んだ大学建設期成同盟会へと発展しました。

ところが、同年春以降、こうした大学建設運動に水をさすような二つの出来事が起こりました。その一つは、同年三月以降、愛知県が学芸大学構想の検討を始めたことでした。一九四八年四月一〇日付の『中部日本新聞』は、次のように報じています。

……愛知学芸大学（仮称）は愛知一師、同二師、同青師、岡崎高師の四校合併のもとに二十四年度発足をめざし青柳知事を委員長とする学芸大学設立促進委員会で検討していたが構想をまとまり予算の大要とともに近く文部省に報告される……

一方、もう一つの出来事は、ＣＩ＆Ｅの指導に基づいて、同年六月に文部省がいわゆる「国

去る昭和二十二年夏、全校挙げての戦災復興並に大学建設運動に依りまして御様の尊き血と汗の結晶が着々と現実に具体化され茲に本校も創立満五年を迎えよりよき学園は日一日と完成されつゝある事を心より喜んでいます。

就ては大変遅くなって誠に申訳ありませんが、「大学建設資金」の決算報告をさせて戴き、あわせて我が学園の一層の進歩発展を期し、皆様方の御支援を御願致します。

昭和二十五年三月一日

岡崎高等師範学校

大学建設期成同盟会

大学建設期成同盟会決算報告

一、収入総額	五二九、八〇一円六一銭
教職員	六三、七八六円六六銭
学生	四二三、三五〇円五〇銭
父兄	四〇、四九七円〇〇銭
雑収入	二、一六七円四五銭
一、支出総額	五二九、八〇一円六一銭
社会科	三五、五八四円〇〇銭
英語科	三八、四六九円〇〇銭
数学科	四九、八六四円〇〇銭
物理科	四五、七七九円〇五銭
工作場	二一、二四〇円〇〇銭
化学科	七九、二五五円五〇銭
生物科	七九、六六四円三〇銭
各科共通	二〇、九三円〇〇銭
記念祭補助	七、四八七円二七銭
岡崎会設立補助	七、〇〇〇円〇〇銭
校誌発行費	五〇、〇〇〇円〇〇銭
事務費	五四、五三四円九九銭
一、差引残高	〇銭

大学建設期成同盟会の決算報告書（『岡崎高等師範学校創立三十周年誌』より）

立大学設置一一原則」（正式名は「国立新制大学実施要領」）を定めたことでした。この一一原則の中には「国立新制大学は特別の地域（北海道、東京、愛知、大阪、京都、福岡）を除き、同一地域にある官立学校はこれを合併して一大学とし、一府県一大学の実現を図る」という原則がありました。

これら二つの出来事のうち、愛知県の学芸大学構想は、愛知第一師範学校が合併を辞退したことによって実現が見送られたとされています。

国立大学設置一一原則については、資料で確認することはできません。しかし、この原則では、愛知県は一大学でなくてもよいという形になっていますが、愛知県には旧制名古屋大学があるので、それ以外の官立学校（岡崎高等師範学校・愛知第一師範学校・愛知第二師範学校・愛知青年師範学

校等）が個別に大学昇格を果たすことは実現困難であったと考えられます。また、すでに述べたように、一九四八年六月前後には名古屋大学と岡崎高師の合併構想が検討されていました。

したがって、岡崎高師における大学建設運動は、こうした複雑かつ流動的な状況の中で次第に立ち消えになったものと推測できます。

◆岡崎高師附属学校の創設

岡崎高師の創設時においては、法律上、高等師範学校には附属中学校を置くことが規定されていました。しかし、すでに第三章で述べたように、岡崎高等師範学校には「代用」の附属学校が置かれ、正式な附属学校は設置されていませんでした。また、終戦直後においては岡崎高師自体が仮校舎を利用していたこともあって、附属学校設置はまだ実現していませんでした。

その後、一九四七年三月になって、附属中学校創設準備委員会が結成されました。同創設準備委員会では、旧制中学校（五年制）としての創設を検討していましたが、新学制の実施に伴って三年制の中学校として同年四月一日に旧海軍豊川工廠寄宿舎の施設を利用して創設されています。岡崎高師附属中学校の第一回入学者選抜は同年四月一五・一六日に行われ、その結果、五月五日には男女各四四名が入学しました。

一方、岡崎高師では、当初五年制の附属中学校（旧制）を構想していたものを三年制の新制

中学校に変更したこともあって、附属高等学校の設置を望む声が少なくありませんでした。一九四八年になって、豊川市から、市立高等学校を移転して代用の附属高等学校とし、将来は岡崎高師附属高等学校として移管するという内容の提案がなされました。そして、この提案に基づいて、一九四九年六月には岡崎高師附属中学校の隣の校舎が改修されて、市立高等学校の移転が行われました。また、同年一一月には、名古屋大学岡崎高等師範学校附属高等学校創設委員会が組織され、翌一九五〇年度の開校に向けて準備が進められました。

この岡崎高師附属高等学校は一九五〇年四月一日に設置されましたが、このとき豊川市立高等学校が県立国府高等学校に合併されました。その結果的、岡崎高師附属高等学校は、市立高等学校校舎を利用して、附属中学校に隣接する形で設置されることになりました。

◆岡崎高等師範学校の廃止

一九五二年三月二十五日、岡崎高等師範学校の第四回卒業式が行われて、一三三名の生徒が卒業しました。この第四回卒業式は、岡崎高師最後の卒業式でもあり、この卒業式に引き続いて岡崎高師の閉校式も行われました。

創設からの七年間に岡崎高師が社会に送りだした卒業生数は、**表4**の通りでした。

表４　岡崎高師卒業者数（第１回～第４回卒業生）

	社会科	英語科	数学科	物理科	化学科	生物科	計
第１回（1949.2.11）			26	15	38	31	110
第２回（1950.3.10）			30	33	30	31	124
第３回（1951.3.25）	35	21	30	31	17	30	164
第４回（1952.3.25）	30	18	20	16	27	22	133
計	65	39	106	95	112	114	531

（『岡崎高等師範学校　五十年誌』より作成）

六　黎明会―岡崎高師同窓会―

◆同窓会の創立

岡崎師範学校同窓会は、一九四九（昭和二四）年一一月五日に、岡崎高師の松原益太校長を会長として創立されました。岡崎高師では同年三月二〇日に第一回卒業式が行われていますので、同窓会はその約七ヶ月後に創立されたことになります。

『岡崎高等師範学校誌』には、同窓会を創設した経緯が報告されています。そこでは、「私共第一回生は、昨春尽きせぬ名残りを留めて、勇躍社会への第一歩を踏み出したのでありますが、あの卒業と就職の多忙の中に母校を巣立っ

てしまった私共に、程過ぎてから大きな忘れ物をした事に気づき始め……濁流渦巻く中に独り押し流される様なものを感じてから何時しか岡崎・豊川に四ヵ年の懐旧を温める」活動が起こり、それらを包括するための同窓会創立の機運が高まったとされています。

◆黎明会への改称

一九四九年に創立された岡崎高師同窓会は、その後「黎明会」に改称されています。残念なことに、大学史資料室には、改称された正確な年月や経緯等を示す資料が残されていません。しかし、岡崎高師関係の資料には、一九五一年一二月一日に施行された「黎明会会則」が掲載されており、その第二条に「本会は黎明会とする」との記述があります。また、岡崎高師同窓会名で一九五二年秋以降に発行されたと思われる閉校記念誌が「機関誌『黎明』」と呼ばれ、一九五四年三月には黎明会の名で「黎明」第二号が発行されています。したがって、岡崎高師同窓会は、一九五一年頃に黎明会に改称されたものと考えられます。

なお、この機関誌「黎明」は、二〇〇二年三月に「黎明会報」として最終号（第三三号）が発行されています。

閉校式当日 —— 昭和27年3月25日式直後図書館前にて名古屋大学勝沼精藏学長、愛知学芸大学内藤卯三郎学長と共に恩師全員の記念写真（『岡崎高等師範学校五十年誌』より）

おわりに

本書では、岡崎高等師範学校について述べてきました。同校は、戦時体制下に創設され、終戦を経て、戦後の学制改革によって新制名古屋大学に包括されたのち、一九五二（昭和二七）年には七年間の足跡を残して廃止されました。

岡崎高師同窓会である黎明会が一九七七年に刊行した『岡崎高等師範学校―創立三十周年誌』には、黎明会の加藤貞夫会長による次のような「序文」が掲載されています。

敗戦間近かの昭和二〇年、岡崎市に誕生したが束の間、空襲での戦火に借用校舎も焼失

した。学校創立と同時に受難の第一歩が始った。その年の暮れには、第二の故郷豊川市へと放浪の旅も始っていた。豊川での校舎は、旧豊川海軍工廠の工員養成所とその寄宿舎であった。やっと学校らしい形態が整いかけると、六三制の学制改革が進んできた。苦悩の末、創設七年にして名古屋大学へ発展的に解消したのである。豊川市における岡崎高師の跡は、その後一大変容をしている。当時は松林に囲まれた、緑の多い所であった。いまはもう昔日の面影はない。……岡崎高師なき跡は、時代と共に大きく変化をしている。そこに住む人々にはかってここに岡崎高師があったことには無関係であろうし、最近発刊された豊川市史にすら、岡崎高師について一行の文字すらない。短命の仮住まい、しかも放浪の果てでは止むを得ないかも知れない。それだけに、岡崎高師をまぼろしにしないための努力は本書の目的の一つである。

（加藤貞夫「序文」『岡崎高等師範学校―創立三十周年誌』）

本書は、名大史ブックレットとして、新制名大に包括された岡崎高等師範学校について取り上げました。当然のことながら、限られた紙数のなかで、岡崎高師のすべてを描くことはできていません。しかし、きわめて不十分ながらも本書を通して、激動期のなかで生まれ、消えていった岡崎高師という存在が今日の名古屋大学の礎石の一つになっているということを再確認

してもらえたのではないかと思います。

引用文献・主要参考文献

名古屋大学史編集委員会編『名古屋大学五十年史』通史一・二（名古屋大学、一九九五年）
岡崎高等師範学校五十年誌編集委員会編『岡崎高等師範学校五十年誌』（黎明会、一九九九年）
金沢大学創立五〇周年記念事業後援会写真集編集委員編『金沢大学　写真で見る五〇年』（同大学創立五〇周年記念事業後援会、一九九九年）
金沢大学五〇年史編纂委員会編『金沢大学五〇年史』通史編（同大学創立五〇周年記念事業後援会、二〇〇一年）
校誌発行委員会『岡崎高等学校誌』（岡崎高等師範学校学生会、一九五〇年）
黎明会『岡崎高等師範学校―創立三十周年誌』（黎明会、一九七七年）

著者略歴

山口　拓史（やまぐち　たくじ）

一九六二年　兵庫県生まれ
一九九四年　名古屋大学大学院教育学研究科博士課程（後期課程）単位取得退学
現在　名古屋大学大学史資料室助手
専攻　高等教育史

名大史ブックレット8
岡崎高等師範学校
――新制名古屋大学の包括学校③――
二〇〇四年三月三一日　第一刷発行

著者　山口　拓史

編集発行　名古屋大学大学史資料室
〒464-8601　名古屋市千種区不老町
電話　〇五二（七八九）二〇四六

印刷所　株式会社　クイックス
〒456-0004　名古屋市熱田区桜田町一九―二〇
電話　〇五二（八七一）九一九〇

表紙写真：岡崎高師校門付近
（社会科2回生の澤口友彌氏が1997年に描画）